学校だより
薫る双葉
～チームワーク・フットワーク・ネットワーク～
令和８年１０月２８日
第１５号

５年生、１泊２日の体験学習

先日の 10 月 14・15 日の２日間、５年生が「千葉県立水郷小見川青少年自然の家」への宿泊体験学習に行ってきました。

ウォークラリーやキャンドルファイヤー、カヌー体験といった普段の学校生活ではできない活動に向き合う中で、その表情は日に日に頼もしく変化していきました。

特に印象的だったのは、夕食のバイキングでのご飯やみそ汁の盛り付けを自ら引き受けたり、片付けで「次は何をすればいい？」と自分から動いたりする姿でした。

家や学校を離れ、自分の力で考え、仲間と協力してやり抜いたこの２日間の経験は、子どもたちにとって大きな自信となったはずです。

今回の小見川宿泊体験では、友達と協力することや助け合うこと、人と人との関わりの大切さを学びました。特におみぼう大冒険やウォークラリーでは、友達と一緒に協力しながら活動したことが楽しかったです。わからないことがあっても、みんなで相談し助け合うことで乗り越えられました。

また、友達と過ごした時間は、忘れられない思い出になりました。

これからも周りの人への感謝を忘れず、友達と協力しながら学校生活を送っていきたいです。

【５年１組　飯笹　結菜 さん】

宿泊体験学習では、学校でできていなかったことができるようになりました。

この宿泊体験をとおして、自分のことは自分ですることや、友達と協力することの大切さを学びました。特に、自分から進んで行動することを意識しました。友達と一緒に活動したり、楽しい時間を過ごしたりしたことが心に残っています。

一人でできないことも、みんなで力を合わせればできると感じました。

これからも学んだことを生かし、進んで行動していきたいです。

【５年１組　常陸　陽大 さん】

小見川に行って学んだことは、自分で行動することや、みんなで協力することです。

学んだこともたくさんありますが、楽しかったこともたくさんあります。その中でも一番楽しかったのはカヌーです。莉都くんとペアになりました。こいでいるとだんだんうでがいたくなりましたが、落ちずにこぐことができました。とても楽しかったです。

これからの学校生活でも自分で行動することや、みんなで協力することを心がけたいです

【５年２組　中村　有沙 さん】

ぼくは、小見川の青少年自然の家での宿泊体験学習で「みんなと協力」「自分で考えて協力」「公共の場でのマナー」というこの三つを絶対に守るめあてとして行きました。

自分の役割は、代表者あいさつでした。あいさつをするときには、少し緊張しましたが、成功することができました。

ウォークラリーでは、グループで協力して、ゴールした後にガリガリ君を食べておいしかったです。

二日間、すごく楽しい宿泊体験学習でした。

【５年２組　石毛　蒼羽 さん】

HP でも学校の様子をご覧いただけます　https://www.city.choshi.chiba.jp/edu/school/es-futaba/

☆ 学校からのお願い ☆

１ 「危機管理意識」を育てる

先日、学校付近の通学路で、自家用車が電柱に衝突する自損事故がありました。

幸い子供たちの登校前だったため大事にはいたりませんでしたが、「もし、これが登校時間帯だったら…。」と考えると、背筋が凍る思いでした。

このように、どんなに自分が気を付けていても、事故に巻き込まれてしまうということが考えられます。そう考えると、自身が「自分の身は自分で守る」という危機管理意識（「あぶない」と気づく力）を身につけることが大事になります。

「うちの子はしっかりしているから大丈夫」「いつも通る道だから慣れているはず」と思っていませんか？

実は、小学生の交通事故が最も多いのは「小学１年生・２年生」、そして行動範囲が広がる「小学４年生」です。特に登下校の時間帯（朝 7:00～8:00、夕方 15:00～17:00）に事故が多発しています。

学校や地域での見守りには限界があります。お子さま自身が「自分の身は自分で守る」という危機管理意識を身に付けるためには、ご家庭での日常的な声かけが何より重要となります。

２ 小学生の「見え方・心理」を知る（大人の常識は通じない）

子どもに「気をつけて」と言うだけでは効果が薄い理由があります。なぜなら、子どもの視野と心理は、大人とは全く違うからです。

（１）「チャイルドビジョン（子どもの視野）」の罠

大人の視野が左右約 150 度あるのに対し、子どもの視野は約 90 度（大人が両手の拳を目の横に置いたくらい）しかありません。つまり、横から来る車や自転車に「本当に気づいていない」のです。

（２）「飛び出し」の心理

子どもは「あっちにおもしろそうなものがある！」「友達が見えた！」と思うと、脳がその１点だけに集中してしまいます。周りの景色や危険が一切目に入らなくなり、体が勝手に動いて（飛び出して）しまいます。

３ 今日から家庭でできる！３つの具体的なアプローチ

日常の会話や行動の中で、お子さんの危機管理意識をアップデートしていきましょう。

（１） シミュレーションクイズ

普段の一緒のお散歩や買い物の道中を「クイズの時間」にします。

①「あそこの角から、もし自転車がビューンって飛んできたらどうする？」

②「ボールが道路に転がっちゃったら、まず何をする？」

このように具体的に「もしも」の場面を問いかけ、子ども自身に考えさせることで、脳内に危険を回避するシミュレーションができ上がります。

（２）「青信号はすすむ」ではなく「青信号は安全を確かめてから」

①「青信号だから絶対に安全」という思い込みが一番危険です。

②信号が青になっても、右・左・右を自分の目で見る。

③右折車や左折車が、自分に気づいて止まってくれたかアイコンタクトをとる。

（もしかしたら、スマートフォンや操作パネルに気を取られているかもしれないので。）

「信号の色のルール」ではなく、「周りの車の動きを見るルール」として教えてあげてください。

3　今日から家庭でできる！3 つの具体的なアプローチ（続き）

（3）「危険を予測する言葉」を教える

①「気をつけて」を具体的な言葉に言い換えます。

・×「気をつけて歩きなさい」

・○「あの曲がり角は車から見えないから、一度止まろうね」

・○「トラックの後ろは運転手さんから見えないから、近づかないでおこうね」

理由とセットで伝えることで、子どもは「あ、ここは危ない場所なのだ」と自分で判断できるようにさせてください。

4　自転車は「車両」であるという意識づけ

先日、自転車に乗る数名の小学生を見かけました。

ヘルメットはかぶらず、歩道を横幅いっぱいに広がって走行していました。

小学校の中学年以降になると自転車を利用する機会が増え、行動範囲も広がることから、重要性が高まってくるのが自転車の安全利用です。特に、自転車事故は被害者となるだけでなく、加害者になる危険性が指摘されています。

今から 20 年近く前の 2008 年、兵庫県神戸市北区で、当時小学 5 年生（11 歳）の少年がマウンテンバイクで下り坂を時速 20～30km で走行中、歩行中の 62 歳の女性と正面衝突し、女性が頭蓋骨骨折などで意識不明の植物状態となったという重大な事故がありました。

2013 年、神戸地裁は監督義務を怠ったとして少年の母親に対し、被害者側や保険会社への損害賠償として計約 9,500 万円の支払いを命じる判決がくだしました。

「自転車は車両である」という認識を子どもたちに理解させることが重要です。特に、従来の交通安全教育では、「被害者にならない」ための行動に重点が置かれてきましたが、これからは、「加害者とならない」ための安全教育の充実が求められています。

まずは子どもたちに、▽ヘルメットの着用▽一時停止の励行▽交差点での安全確認▽二人乗りやながら運転の危険性――などについて、具体的な場面を想定しながら指導する必要があります。また、自転車点検の方法や整備の大切さについて学ぶ機会を設けることも、交通安全意識の向上につながります。そして、交通ルールを守ることは、自分の命を守るだけでなく、周りの人の大切な命や安全を守ることにもつながります。

5 子どもの「自立」を支えるために

今は小学生でも、いつかは一人で社会に踏み出していきます。

「どうすれば安全に行動できるか」を自分で判断できる力を養うことが、お子さんに教えるべき本当の危機管理意識ではないかと思います。

そして、子どもは大人の行動を本当によく見ています。

「急いでいるから」と、大人が信号無視をしたり、横断歩道のない場所を渡ったりしているのを見た時、「大人もそうしているなら…」と、子どもは思うのはないでしょうか？

大人が日常的に交通ルールを守り、安全を確認する姿を見せることが、子どもにとって最高の教科書になります。

そのための第一歩として、ぜひ家族間の会話で「今日の帰り道、危ない所はなかった？」と、お子さんに声をかけてみてください。

令和８年 10 月 27 日　　銚子市立双葉小学校 校長　小林　健一